『平家物語』諸本における横笛の人物像

栃本　綾

一、はじめに

『平家物語』に登場する横笛と滝口との悲恋の物語はよく知られているが、覚一本をもとに概略を述べると次の通りである。重盛に仕える武士であった滝口は、横笛を愛するが父に反対される。親の諌めに背けば不孝になり、女を捨てれば契った言葉も嘘になると悩んだ滝口は出家する。滝口の出家を聞き横笛は往生院を訪ねるが、滝口は横笛と対面しなかった。その後横笛は出家するが、思いがつもって死んでしまう。横笛についての研究では従来、語り本は横笛が出家するので出家タイプ、読み本は横笛が入水するので入水タイプと区分される。出家と入水という結末による区別は適切ではあるが、本論ではそれを区別した上で横笛の一つ一つの言動、心情から横笛の人物像についてより深く考察したい。また従来の横笛の研究では主に覚一本と延慶本が取り上げられているため、本論ではそれ以外の諸本も取り上げ、諸本全体を通して横笛像を考えることとする。

二、語り本における横笛の特徴

ここでは語り本における横笛の人物像を捉えるため、覚一本、高野本、屋代本、中院本、両足院本、鎌倉本、百二十句本の七本を取り上げて、相互の共通点と相違点について考え、全体の特徴をまとめる。

語り本諸本は以下の六点が共通している。

①横笛は建礼門院の雑仕である。

②横笛は滝口の出家を伝え聞いて恨む。横笛は「われをこそすてめ、さまをさへかへけん事のうらめしさよ。たとひ世をばそむくとも、

などかかくと知らせざらん。人こそ心つよくとも、尋ねてうらみん」と考えて滝口の元を訪ねる。滝口は黙って出家したため、横笛は滝口に捨てられたと考え、滝口を恨む。また横笛は出家を知らされなかったことを恨んでいる。

③横笛は訪ねた理由を伝えない。横笛は具してきた女に「わらはこそ是まで尋ね参りたれ」と言わせるだけであり、滝口は横笛の来訪の理由を知らない。

④滝口は横笛に出家の理由、本心を伝えない。人を出して「まったくこれにさる人なし。門たがへでぞあるらん」[①]と言わせ対面を断る。

⑤和歌の贈答がある。横笛は出家し、それを聞いた滝口は横笛に歌を贈る。それに対し横笛も返歌をする。

⑥横笛は思いがつもって死んでしまう。

ここで語り本において、唯一、二人が人を介さずに気持ちを伝え合う和歌について考える。

Ⅰそるまではうらみしかどもあづさ弓まことの道に入るぞうれしき（滝口）

Ⅱそるとても何かうらみんあづさ弓ひきとどむべきこころならねば[②]（横笛）

この二人の和歌は従来、次のように解釈される。まず『平家物語全注釈[③]』では、

Ⅰ私は出家するまでは憂き世を恨みもしましたが、あなたも仏道に入ったということを聞いて、まことに嬉しく思っています。

Ⅱあなたが出家なさってもどうしてお恨み申しましょうか。とてもお引きとどめすることのできる心ではないのですから。それゆえに私もこうしてあなたにならって出家したのです。

と訳される。『新潮日本古典集成[④]』、『新日本古典文学大系[⑤]』もほとんど同様である。『日本古典文学大系[⑥]』では、恨みを悲しみと解釈する以外は先の三つと同様である。『日本古典文学全集[⑦]』では、

Ⅰあなたが尼になるまでは私の事を恨んでいたが、そのあなたも仏道にはいったと聞いてうれしい。

Ⅱ尼になったといっても何も恨むことはない。とても引きとめる事のできるようなあなたの決心ではないから。

と訳される。いずれも滝口が横笛の出家を喜んでいること、横笛が滝口が契機で出家したということで共通し、横笛は出家に対し納得しているように解釈される。『日本古典文学全集』が他とは異なり「そるまではうらみしかども」の主語が横笛である。「あなたが尼になるまでは私の事を恨んでいたが」に対し「尼になったといっても何も恨む事はない」と解釈するが、それならば、贈歌に対して「尼になったので何も恨むことはない」と表現すべきであろう。従って『日本古典文学全集』の解釈はとらず、他の解釈をもとに考える。

この和歌について小野美典氏は、覚一本において滝口と横笛は心の交流がないまま和歌の応酬をむかえ、和歌により心の接点を持ったと述べる。[8] だが小野氏自身が述べるように、この和歌の贈答まで二人には会話が全くない。そうした二人が和歌だけで互いの気持ちを理解できるのだろうか。滝口は横笛の出家を聞きこの和歌を贈る。だが滝口にとって横笛の来訪の理由、出家の理由は不明のままのはずである。和歌にある「うれしき」という表現から横笛の出家を喜ぶ気持ちが分かるが、出家をしたという事実だけから横笛が救われたと思い喜んでいたのではないだろうか。

しかし横笛にとって出家は本当に救済となったのか疑問が残る。和歌の贈答後、横笛は思いがつもって死んでしまう。横笛は滝口の出家の理由を知らないままなので、滝口に捨てられたと思っている。訪ねたが気持ちを伝えられず、相手の本心も聞けないまま追い返された横笛は、納得できないままであったと考えられる。納得できない気持ちのままで出家をしたために救われず、思いがつもって最終的に死んでしまったのではないだろうか。つまり出家は横笛にとって救済ではない。滝口は横笛の出家を喜ぶが、横笛にとって出家は救済ではなく、喜びでもない。和歌の贈答では二人は心の接点を持つことはできておらず、気持ちにはずれがあったと考えられる。

次に、語り本諸本間の相違点を見てゆきたい。高野本、屋代本、中院本、両足院本、鎌倉本は覚一本とほぼ同様なので、ここでは覚一本と百二十句本とを比較する。

〈覚一本〉

①横笛は滝口に恨みの気持ちを伝えない。滝口の元を訪ねた横笛は、自分の来訪と姿を見せてほしいということしか伝えない。滝口の元を訪れる前は「尋ねてうらみん[9]」と考えていたが恨みを伝えないのである。そして最後まで本心を伝えずに帰っていく。ここからは横笛の弱さが窺われる。それは対面を断られた後「情なううらめしけれども、力なう涙を押さへて帰りけり」と何もできずに帰ることからも分かる。和歌の贈答の際も、先に見たように二人の気持ちはすれ違っている。滝口と横笛は互いの気持ちが全く分からないまま、ずれたまま終わっている。

覚一本の横笛は、滝口に本心を言えずすれ違ったまま思いを募らせて死んでいった弱く悲しい女性として描かれていると考えられる。「われをこそすてめ、様をさへかへけん事のうらめしさよ。たとひ世をばそむくとも、などかかくと知らせざらん。人こそ心強くとも、尋ねてうらみん」、「横笛情なううらめしけれども」からは恨みの気持ちも伝わるが、横笛は恨みを伝えることができておらず恨みが強い女性というよりは気持ちを伝えられない弱い女性として描かれている。

〈百二十句本〉

①**横笛の出自と美しさが描かれる。**出自は「もとは江口の長者が娘なり」[10]とある。また「入道これを見給ふに、みめかたち優なりければ、中宮の雑仕に召さるる。かかるわりなき美人なれば、横笛十四、滝口十五と申す年より、浅からず思ひそめてぞかよひける」と他の語り本にはない美しさが描かれる。

②**横笛は恨みの気持ちを伝える。**具してきた女に「わらはこそ、これまで訪ねまゐりたれ」と言わせるのは他の語り本と同様だが、滝口に対面を断られた後が異なる。対面を断られた後、「うらめしや。発心をさまたげたてまつらんとにはあらず。ともに閼伽の水をむすびあげて、ひとつ蓮の縁とならんとこそのぞみしに、夫の心は川の瀬の、刹那に変るならひかや。女の心は池の水の積りてものを思ふなるも、いまこそ思ひ知られけれ」と、横笛は自分の望み、滝口の心変わりと女の悲しさとに対する恨みを伝え、最初の「たづねて、いまは恨みん」という思いを果たしている。だが横笛の思いに滝口は何も答えず、本心を伝えない。結局二人の気持ちは通わないままである。最後に滝口に恨みの気持ちを伝える横笛は弱い女性というよりは恨みの強い女性として描かれている。百二十句本の横笛像には覚一本の横笛に美しさと恨みの要素が加わっている。

以上のように語り本全体としては百二十句本を除いて横笛の描かれ方に大きな違いはない。横笛と滝口は互いに本心を伝えずすれ違っており、出家しても救われないということで一致する。また百二十句本のように恨みを伝えても結局は何も変わらない。語り本の横笛は、滝口に本心を伝えられずに死んでしまった、或いは、伝えても事態を変えられなかった弱い女性、すれ違ったまま死んでしまう悲しい女性として描かれていると考えられる。

さらに、ここで語り本に共通する出家について考えたい。横笛の出家について十代田由美氏は、滝口と同じ道を歩みたいと願った上での行為で、あわれであるが、先に希望の光は見えると述べる。[11]しかし先述したように横笛は滝口の出家の理由を知らず滝口に捨てられたと思っている。訪ねたが気持ちを伝えられず、相手の本心も聞けないまま追い返された横笛は納得できなかったはずである。そうした気持ちのままで出家をした横笛に希望の光はなかったのではないか。横笛にとって出家は救済ではなく、横笛は救われない哀れな女性として描かれていると考える。

三、読み本における横笛の特徴

ここでは読み本における横笛の人物像を捉えるため、長門本、南都異本、源平盛衰記、延慶本の四本を取り上げ、相互の共通点と相違点について考え、全体の特徴をまとめる。

読み本諸本は以下の七点が共通している。

①**建礼門院の雑仕である**。半者、半物、曹仕、美女と表記は諸本で異なるが、同義である。

②**滝口は横笛に何も言わずに出家する**。

③**滝口の出家を知り横笛は滝口の元を訪ねる**。

④**横笛は自分の言葉で滝口に気持ちを伝える**。具したる女は登場しない。

⑤**返事をしない滝口に対し、横笛は恨みの気持ちを伝える**。

⑥**滝口と横笛が対面することはない**。

⑦**横笛は川へと身を投げて死んでしまう**。

次に、読み本諸本間の相違点を見てゆきたい。諸本の、他と異なる点をまとめると以下の通りである。

〈長門本〉

①**横笛の出自と美しさが描かれる**。出自は「神崎の君の長者の侍従が娘也[42]」とある。また「みめかたちはけうらんにして、姿は春の花、顔は秋の月、翡翠のかんざしもながければ、せいたいがたて板に水を流せるがことくみゆ、肌も白ければ、王昭君にもことならず」とあり、美しさが強調されている。

②**扇に書かれた滝口の歌を見て出家を知る**。横笛は他の諸本では滝口の出家を伝え聞いて知るが、長門本では扇に書かれた「そるまでも頼しものをあづさゆみ誠の道に入ぞうれしき」という滝口の歌を見て出家を知る。滝口が来なくなったことを悲しみ、滝口が年頃親しんでいた三条で滝口について尋ねると、扇が投げ出される。その扇には前掲の和歌が書かれており、そこで滝口の出家を知る。ここから出家を喜ぶ滝口の思いを横笛は一応知ることになるが、滝口の出家の理由は不明なままであり横笛は滝口に捨てられたと思っていたと考えられる。

③**横笛の思いは菩薩に届く**。滝口の元を訪ねる途中で、横笛は法輪寺の虚空蔵菩薩の前で「虚空蔵菩薩は衆生の願をみて給ふぼさつなり、今生にてあかで別れしつまを、今一度逢せてたばせ給へ」と祈念する。すると「虚空蔵ぼさつも哀とか覚しけん、風は吹ねども御戸をさつと開き、いうなる御声にて、汝が夫妻（マヽ）は是より北の谷に、柴の庵を結びてある也、此世の対面うすかるべしとて、御戸はをさまりぬ」とあり横笛の願いが菩薩に届いている。ここから横笛の滝口への強い思いが分かる。

④**滝口は一度も返事をしない**。庵室を訪ねた横笛は「今更かなしく涙もかきあへず、やゝ久しく有て、御行衛を知らせ給はぬ事は、いかなる御こゝろづよさとや、虎伏すのべ蓬が杣なりとも、おくれじと契り給ひし事は、さながら偽にてありけるものを、されども昔のよしみ忘れがたくて、是まで尋ね参りたり、一蓮の身ともならん」

と泣きながら伝え、滝口は動揺するが返事はしない。さらに横笛は「心をしるべにて是迄尋来りたるかひもなく、とぢ籠り給へる御心強さよ、せめては今一度御声なりとも聞させ給へや」と伝えるが滝口は答えない。そして横笛は「時雨にそむる松だにも、かはらぬ色はあるものを、後の世までと契りしに、早くもかはる心かな」と泣きながら帰っていく。必死に気持ちを訴えたが出家の理由を聞くことはできず心変わりをしたと思っており、横笛の悲しさが分かる。

⑤絶望、親への気遣いが描かれる。入水の様子は「かゝるうき世に存へて、何にかはせんと思ふに、たゝし思おく事とては都に老たる親一人、それも仏道なるならば、などか迎へ取ざらんと思ひて、さつた王子のうへたる虎に身を投げ、生年十七と申に、底のみくづとなりにけり」とある。「かゝるうき世に存へて、何にかはせん」からは横笛の絶望が分かる。また死ぬ前に親を気遣う優しさもみえる。

李鮮瑛氏は横笛の入水について成仏後の還来穢土の本願という仏教的孝養観が明確で入水往生への意志があると指摘し、入水は出家の代わりとなるものだったと述べる。[13] また横笛が出家もせずに入水往生を信じた背景として滝口の葬送を挙げる。[14]

確かに滝口は横笛の葬送をするが、横笛は本当に入水往生を信じており、往生を望んでいたのだろうか。今までの横笛を振り返ると、菩薩に届く程の強い思いを持ち必死に訴えるが滝口には届かない。和歌により滝口の気持ちを知るが、一方的に出家を喜ぶ気持ちを知っただけで出家の理由を知ることはできず、滝口に捨てられたと思っている。そして入水直前の「かゝるうき世に存へて、何にかはせん」という言葉には先述したようにこの世への横笛の絶望が表れている。またこの世で気に掛かるのは親のことだけとあり、横笛は自分のことはもはや気にしていない。この横笛の様子からは希望を持つ様子は窺えない。そのような横笛が入水往生を信じていたとは思えず、横笛の入水は絶望と悲しみによるもので、入水に希望を持っていなかったと考える。このように世の中に絶望して入水するので長門本の横笛は悲しみの側面が特に強く描かれていると言えよう。

〈南都異本〉

①滝口の気持ちを全く知らない。横笛は出家を聞き滝口の元を訪ねる。訪ねた後の様子は長門本の④とほぼ同様で、横笛がどんなに訴えても滝口は返事も対面もせず横笛は捨てられたと思ったまま帰る。長門本では和歌により一方的に滝口の出家に対する喜びを知るが、南都異本では滝口の気持ちを全く知らない。

②入水に希望を持つ。憂き世にいても滝口との対面は叶わないと悲しんだ横笛は「南無西方極楽世界阿弥陀如来本願誤タズ飽カデ別ル夫婦ノ中ライト一蓮身ト成タマヘ」[15]と言って入水する。ここから横笛は入水に願いを託しており入水に希望を持つ様子が分かる。

南都異本の横笛は滝口の気持ちを全く知らないままであり、強く訴えても気持ちは届かない。しかし長門本のように絶望して死ぬのではなく、入水に願いを託しており、悲しさの中にも来世に希望を持つ女性として描かれる。

〈源平盛衰記〉

①出自と美しさが描かれる。「二人の半物あり。横笛・刈萱とぞいひける。共にみめ形類ひなく、心の色も情あり。…横笛といふは、本は神崎の遊君、長者の娘なり。大方も無双の能者、今様朗詠は所の風俗なれば言ふに及ばず、琴・琵琶の上手、歌道の方にも勝れたり[16]」とあり、出自は長門本と同じである。「みめ形類ひなく」から美しさが分かるが、もう一人の女性と並べられているので美しさはさほど強調されていない。それより横笛の美貌以外の才能が詳しく描かれる。

②滝口の出家を知る前の嘆きが描かれる。出家を知った後の横笛の嘆きは他の諸本にも描かれるが、源平盛衰記では出家を知る前の嘆きも描かれる。「日頃月頃経けれども、夫も見えず音信もなし。ただ仮初の契りかや。移れば変る心かと、独り思ひに焦れけり。縦ひ我が許へこそ通はずとも、本所の衆にて侍るに、出仕の止るべき事はなしと、昼は終日に思ひ暮し、夜は八声の鳥と鳴き明す。心は日々に駿河なる富士の高峰と焦るけれども、煙たたねば人とはず。さりとて人に知られねば、語りて慰む方もなし。呉竹の夜ごとに物が思はれて、音のみ泣かれて琴の音の、伊勢国鈴鹿の山の心して、何となるべき我が身やらんと、朝夕嘆きけるこそ哀れなれ」と横笛の孤独、嘆きが描かれ、滝口に対する思いが分かる。

③出家を自分のためと考える。滝口の出家を聞いた横笛は「我ゆえ様を替へけん事の無慙さよ。世を背き、深き山に籠るとも、などかはかくと知らせざる。夜かれ日かれをだにも嘆きしに、絶えぬる仲こそ悲しけれ。人こそ心強くとも、尋ねて恨みん」と考える。横笛は滝口の出家の理由を知らないのだが自分のためだと考える。

④仏の前で祈る。滝口の元を訪ねる途中、横笛は法輪寺で「南無帰命頂礼大聖虚空蔵菩薩、あかで別れし滝口に、今一度」と祈る。ここからは滝口への思いが分かるが、菩薩は長門本のように滝口の場所を教えることはない。

⑤滝口の本心を知る。横笛が庵室に着くと滝口は法華経の提婆品を読んでいる。そして横笛に気付かないまま、「我が親世にありしかば、何不足とも思はざりしかども、横笛が事に心に叶はぬ憂き世の中も思ひ知られて、様を変へ、かく行なひて候へば、悲しき女は還つて菩提の善知識と覚えたり。人は心弱くては、仏道は遂ぐまじきにてありけるぞ。後生はさりとも助かりなんものを」と言う。ここで横笛は滝口の出家が自分のためだと知る。

⑥滝口は人を出して返事をさせる。滝口は横笛の来訪を知り人を出して「これにはさる事候はず。人違ひにておはするか。滝口とは誰人ぞ」と言わせる。他の読み本諸本では仲介の人は登場しない。それに対し横笛は「げに入道の声のし給ひつるものをや。様をこそ変へ給はんからに、心さへ強面くなり給ひけるうらめしさよ。させる妨げになるまじ。我故に貌をやつし給へると承れば、今一度墨染の姿をも見奉り、又便りあらば自らも苔の袂に裁ち替へて、花を求め香を焼き、共に後生を助からんと思ひてこそ、遥々尋ね参りたれ。それまで誠に叶はずば、ただ出で給ひて、今一度見え給へ」と言うが滝口は返事も対面もしない。

⑦冷静な様子が描かれる。横笛は「適々ありと聞き得つつ、声をたよりに尋ぬれば、主の僧ははしたなく、なしと答へて出ださねば、憂き身の程もあらはれて、今は人を恨むに及ばず、さすが明け行く空なれば、人の為つつましと思ひつつ、山ふかみ思ひ入りぬる柴の戸の真の道に我をみちびけと読み棄てて、この世の見参は叶はずとも、朽ちせぬ契りにて、後世には必ずと、「さらば暇申す、入道殿」と言って帰っていく。「今は人を恨むに及ばず」、「人の為つつましと思ひつつ」からは恨みの気持ちがおさまり、滝口を気遣う様子が分かる。他の諸本では滝口を気遣う姿は描かれない。また和歌からは希望を持つ様子が分かる。そして帰り際にきちんと別れを告げており冷静な様子が分かる。横笛は滝口の出家が自分のためと知っていたので、滝口を気遣ったり、冷静な振る舞いができたのだと考える。

⑧入水の直前も冷静である。横笛は「つくづく物を案じつつ、いかなる滝口にて、悲しき中を思ひ切り、かく心つよく世を背くぞ。いかなる我なれば、蚫の貝の風情して、難面くながらへて、由なき物を思ふべきぞと思ひければ、桂川の水上、大井川の早瀬、御幸の橋の本に行き、かづきたりける朽葉色の衣をば柳の枝に脱ぎ懸け、思ふ事ども書き付けて、同じ枝に結び置き、歳十七と申すに河の水くづとなりにけり」と入水をする。帰り際は滝口を気遣い、納得していた様子だったが、やはり納得できなかったことが分かる。また死ぬ直前に思うことを書くことから、衝動的な入水ではなく冷静に行動する様子も分かる。

源平盛衰記の横笛は滝口の出家の理由を本人から聞いているので、出家の理由を知らずに入水する他の諸本に比べると、横笛にはまだ救いがあったのではないだろうか。滝口も横笛の気持ちを知っており、二人はすれ違ったままではなく、一応通じ合っている。また帰り際と入水の直前の様子から、横笛は冷静な女性として描かれていると考えられる。

〈延慶本〉

①**出家前夜の様子が描かれる。**横笛に会えるのは最後だと思い涙を流す滝口に、横笛は「危ミテ、「何故カクハイタク塩折給ヘルゾ」トアヤシミナガラ、「イツトナキ言ノ葉ニハ、出仕ヲノミ物憂キ事ニ思給ヘル事ナレバ、サソノ一夜ヲ」[17]と考える。横笛は滝口の思いに気付いておらず、別れにも気付かない。

②**出家を知る前に入水を考える。**「絶ヌル夜半ヲ恨テ、「何ナル淵川ニモ投身バヤ」」とあり、入水を考えている。他の諸本では嘆きはみられても、この時点では入水までは考えていない。ここから滝口への思いの強さが分かる。

③**和歌の贈答がある。**横笛は滝口に声を掛ける前に、滝口が「世ヲ厭ヒ浄土ヲ傾フ墨染ノ有繋ガニヌルヽ袖ノ上哉」と和歌を詠むのを聞き、「恨敷ヤ早晩カ忘レム涙河袖ノシガラミ朽ハハツトモ」と返歌をする。滝口の和歌からは出家を悲しむ気持ちは分かるが、悲しみの理由、出家の理由は分からない。そして横笛の和歌からは滝口を恨む気持ちが分かる。

④**滝口は最後に返事をする。**他の読み本諸本では横笛が何を言っても滝口は返事をしなかった。しかし延慶本では「今生ノ対面セムモ今計、責テハ御音計ヲモ聞カセサセ給ヘ」という横笛に対し、滝口は「誰故ニカヽル道ニモ思入ゾトヨ。今世ノ対面不可有。有契者、一蓮ノ上ニト祈給ヘ」と返事をし、滝口は横笛の言葉に答える。横笛は出家の理由が自分にもあることを知り、滝口の気持ちを知るが「女是ヲ聞テ、恨ノ涙セキアエズ」と恨みの涙を流す。横笛は滝口の気持ちを聞いても恨みで満ちており納得できていない様子が分かる。

⑤**その場で出家をする。**横笛は「自ラ髪ヲ押切テ、庵室ノ窓ニ投懸クトテ」とその場で出家しており、衝動的な女性であることが分かる。そして「剃ルマデハ浦見シ物ヲアヅサ弓誠ノ道ニイルゾウレシキ」という和歌を詠み、滝口はそれに対し「ソルトテモナニカウラミムアヅサ弓引留ムベキ心ナラネバ」と返す。この和歌は他の諸本とは歌の詠み手が逆である。

ここで横笛の出家と和歌の解釈について考えておきたい。横笛の出家と和歌の解釈には主にA喜びとB恨みの二つの考え方がある。

まずA喜びとする原田敦史氏は横笛に残された唯一の道として「有契者、一蓮ノ上ニ」という可能性があり「誠ノ道ニイルゾウレシキ」と出家の喜びを表明したと述べる。[18]小林美和氏は髪を切る行為が滝口への決別宣言であると同時に自らの罪深き執心への縁切り状だったという可能性を示す。[19]

次にB恨みとする山下宏明氏は横笛の和歌に対して、その心中はまだ恨みに満ちており、横笛は髪を投げ懸けたのであって、この一

首にはとげがあると述べる。[20] 小野氏は現世離脱したならばなぜ入水自殺を図るのかと指摘し、横笛の和歌の背後には髪を投げかける行為があり、かなり屈折した心情表現であると述べる。[21]

私も山下氏・小野氏と同様に、横笛の出家は恨みによるものと考える。その後の和歌も恨みの気持ちを表現したものであり、滝口に対する皮肉であったと考える。それは③の和歌や④の「恨ノ涙セキアエズ」という描写、切った髪を窓に投げかける行為からも分かるように横笛の恨みの気持ちが強いからである。そのような横笛が髪を切ってすぐ滝口への恨みを忘れ、出家を喜んだとは考え難い。また対面を断られた直後に出家することから、考えた上での出家ではなく衝動的なものであったと考えられる。従ってこの和歌は表面上は納得しているようであるが、横笛の皮肉や恨みが込められていたと考える。

⑥入水の前に歌を詠む。「横笛ハ出家シテ、東山清岸寺ト云所ニ行澄テ居タリケルガ、彼所ハ都近シテ、知モシラヌモ押並メテ、問事シゲキ宿ナレバ、トガムル事モ右流左クテ、何レノ山ノ辺ニモト、アクガレ行ケル程ニ」とあり修行に集中できていない。そして「如何ナル男ナレバ、吾故ニカヽル道ニモ思入ゾ。イカナル女ナレバ、浮世ニナガラエ、心ニ物ヲ思ラム」と考え、「恋シナバ世ノハカナキニ云ナシテ無跡マデモ人ニ知スナ」と詠んで入水する。この歌から横笛は自分の死を知らせたくないと考えていたことが分かる。横笛は滝口の前で髪を切り皮肉として出家を喜ぶ歌を詠んでその場を去ったため、自分が恋死にをしたと思われたくなかったのではないだろうか。そのためにこの歌を詠んだと考える。

この入水直前の様子について山下宏明氏は罪の深さを自覚した横笛は「イカナル女ナレバ、浮世ニナガラエ、心ニ物ヲ思ラム」と反省し、殊勝でいじらしい横笛像が見られると指摘する。[22] しかしこれまでの横笛の恨みの深さや、皮肉として出家を喜ぶ歌を詠んだことから考えると入水直前に急に横笛が反省するというのは考え難い。ここでの横笛は反省の気持ちではなく最後まで滝口に対する恨み、滝口に自分の死を知られたくないという気持ちを持っていたのではないだろうか。

⑦横笛は供養されない。他の諸本では、横笛は入水後滝口によって供養されるが、延慶本では横笛は供養されていない。つまり横笛は死後も救われない女性として描かれている。

延慶本では、横笛は恨みの強い女性として描かれる。滝口の気持ちを知った後も恨みの気持ちがおさまらず、その場で衝動的に出家する。納得できないままの出家だったために物思いも尽きることなく、結局は入水してしまう。そして供養されることもない。延慶本の横笛は恨みの気持ちが強く、最後まで救われない女性として描か

れていると考えられる。

読み本全体として考えると、最終的に横笛が入水し死んでしまうことは一致するが、そこに至るまでの過程や横笛の描かれ方はかなり異なる。美しさや出自、悲しさ、恨み、入水直前の様子など、諸本により横笛の描かれ方は異なっている。横笛は滝口との対面を果たすことができない悲恋の女性というだけではなく、滝口に対して気遣いをみせたり、強い恨みを抱いたりする。諸本によって様々な人物像が浮かび上がってくるのである。横笛の描かれ方が語り本諸本ではほぼ同様であるのに対し、読み本諸本ではそれが多岐に亘る理由として語り本と読み本の成立の違いも関係してくるであろう。その違いについては後述する。

四、語り本と読み本における横笛の特徴の比較

これまでの結果をまとめると、語り本全体では百二十句本を除いて横笛の描かれ方に大きな違いはない。滝口に本心を伝えることができず、出家をしても救われることなく死んでしまう女性として描かれる。読み本全体では美しさや出自、悲しさ、恨みの気持ち、入水の様子など諸本により描かれ方は異なり、横笛は多様な人物像を持っている。

語り本と読み本を比較すると出家と入水という違い以外にも、出自や美しさ、恨みや悲しさの感情、滝口に対する行動や言動など多くの点で異なることが分かる。その中でも滝口に対し横笛が語り本では本心を伝えないこと、読み本では本心を伝えることに注目したい。百二十句本では、最後に横笛は恨みを伝えるので例外的だが、他の語り本諸本では横笛は滝口に本心を伝えない。人を通じて滝口に自分の来訪と姿を見せてほしいということを伝えるだけである。一方読み本諸本では、横笛は滝口に対し、本心を自分自身の言葉で伝える。この違いにはどのような効果や意図があったかについて考えたい。

読み本は横笛自身に本心を伝えさせることで、揺れる滝口の心情を深く描き、強く訴えられても動揺を乗り越え聖として成長していく様子を描こうとしたのではないだろうか。この点について考えるため、以下、横笛に対する滝口の心情や行動について語り本と読み本を比較する。

百二十句本以外の語り本、ここでは覚一本をもとに考える。覚一本では「わらはこそ是まで尋ね参りたれ。さまのかはりておはすらんをも、今一度見奉らばや」という横笛に対し、「滝口入道、胸うちさわぎ、障子の隙よりのぞいて見れば、まことに尋ねかねたるけしきいたはしうおぼえて、いかなる道心者も心弱くなりぬべし」と動揺はするが対面はしない。そして横笛が帰った後、同宿の僧に対

して「これもよにしづかにて、念仏の障碍は候はねども、あかで別れし女にこのすま居を見えて候へば、たとひ一度は心つよくとも、又もしたふ事あらば心もはたらき候ひぬべし。暇申して」と言う。ここから一度目は心強く抑えたが二度目は心も動いてしまうだろうという滝口の心の弱さ、聖になりきれない様子が分かる。横笛に対する滝口の気持ちが分かるのは、覚一本ではこの部分だけである。

次に、読み本諸本をみていく。長門本では、横笛が来訪を伝えると、滝口は「我わりなく思ひし女の声と聞に、胸さわぎてかきくらす心地して、いかにして是まではおはしたるぞと云て、走出ばやと思ひけれども、さては仏に成らん哉、生死のきつなにこそと心づよく思ひて、いと、門をとぢて返事もせざりければ」とあり、横笛の登場に動揺するが必死に自分を抑えている。それでも諦めずに声だけでも聞かせて欲しいと頼む横笛に対し、滝口は返事をしない。ここから滝口の固い意志が分かる。そして入水した横笛を見た時、滝口は「入道云ばかりなくて、みづからたき木を拾ひ、栴檀の煙りとたき上げ、空しく骨をひろひ、都の辺り猶妄念もこそおこれとて」と言い高野へと上る。横笛の死に対する動揺はあまりみられず、滝口は冷静に供養をしているように感じられ、聖として行動している。

源平盛衰記では、横笛の来訪に対し、「誠ならぬ事かなと胸打騒ぎ、障子の間よりこれを見れば、実に横笛にぞありける。色々の小袖に薄衣引き纏ひ、そやうの耳踏みきりて、袖は涙、すそは露にぞしをれたる。通夜尋ね侘びたるけしきは、堅固の道心者も心弱くぞ覚えける。無慙やな。誰これにとは教へけん。何とてこれまで来けん。出でて物語をもせばや、見て心をも慰めばやと思ひけれども、主の見るも恥かしく、言ひつる事も験なく、さては仏道なりなんやと思ひ切り」と考えて、滝口ではないと伝える。ここでも横笛の登場に動揺するが仏道に入った身だと必死に自分を抑える。それに対し恨み言を言い、対面を望む横笛に滝口は「入道千度百度出でばやと思へども、言ひつる事も恥かしく、出でて由なき事もやと思ひつつ」と揺れながらも自分を抑えて対面しない。そして立ち去る横笛に対し「時頼入道も心強くは出でねども、悪からぬ仲なれば、庵室の隙より後姿を見送りて、忍びの袖をぞ絞りける」と滝口は涙を流しており横笛に対する強い思いが感じられる。横笛の入水を聞いた時は「河端に趣き、水練を語らひて淵に入り、女の死体を潜き上げ、火葬して骨をば拾ひ、頸に懸け、山々寺々修行して、ここかしこにぞ納めける。いかにも都近ければこそ、かかる憂き事をも見聞くとて、高野山に登りつつ、奥の院に卒塔婆を立て、女の骨を埋みつつ、我が身は宝幢院の梨坊にぞ住しける」と描かれる。ここからは滝口の横笛への思いも感じられるが、横笛をしっかり供養する聖としての滝口の姿が描かれる。

南都異本では、横笛が来訪を伝えると、滝口は「入道別無ク思シ女ノ音ト聞ニ胸騒ギ掻テ闇心地シテ何ニシテ是マデハ坐タルゾト云テ走出バヤト思ケレドモ将テハ仏ニ成ンヤ生死妄念ニコソト心憂ク思テ最モ門ヲ閉ジ返事モセザリケレバ」とあり、動揺はするが自分の気持ちを抑える。それでも諦めずに訴える横笛に対しても滝口は心強く返事をしない。ここまでは長門本とほぼ同様である。横笛の入水を聞くと「滝口入道御有様ヲ伝エ聞テ急ギ往テ見タリケレバ別無ク念シ女ナリ、我故ニ加様ニ成ケリト思ワレ弥悲シミテ詮方無カリケレドモ可ナラネバ将テモ有ルト籠ニ薪ヲ積ミ暮ノ煙ト成ル骨ヲ拾テ頸ニ懸ケ都辺リハ猶妄念モコソ発ル」と高野山へ上る。自分のために死んでしまった横笛を思い悲しむが、悲しんでも仕方がないと考え供養をする。ここから横笛への思いが感じられるが、同時に横笛の死に左右されない滝口の意志も分かる。

延慶本では、横笛が来訪を伝えると滝口は「滝口入道、破無ク思シ女ノ音ト聞ニ、胸騒ギ、書キ暮ラス心地シテ、馳リ出、見バヤト思ヘドモ、「サテハ仏ニ成ナムヤ。生死ノ紀綱ニコソ」ト心強ク思テ、弥返事モセザリケリ」とあり動揺はするが自分を抑える。しかし次の行動が他の諸本とは異なる。第三節でも述べたが、延慶本以外の諸本では滝口は決して返事をしなかった。しかし延慶本では、せめて声だけでも聞かせて欲しいという横笛に対し、滝口は「誰故ニカヽル道ニモ思入ゾトヨ。今世ノ対面不可有。有契者、一蓮ノ上ニト祈給ヘ」と返事をする。この言葉には滝口の横笛に対する思い、そして苦悩が表れている。この滝口の言葉は自分は必死に感情を抑えているのに、諦めずに訴えてくる横笛に対し、押さえきれずに出てしまった滝口の本心であったと考える。また本心を横笛に伝えることで、横笛に自分の気持ちを理解し、対面できないことを納得してほしかったのではないだろうか。そして横笛の入水を知ると「都近クスマヒシテ、加様ニ心憂事ヲ聞ニ付テモ、傾道ノ障トモ成ヌベシ。我身コソアラメ、年荘ナリツル女ヲサヘ、世ニ無者ト成シツル事ヨ」と言い、永観律師の庵室を尋ねる。ここからは横笛を死なせてしまったことへの後悔、横笛への思いが分かる。障りとなるということは完全には修行に集中できておらず、宗教心が揺らぐことを恐れているとも考えられる。滝口は宗教心が強い場面もみられるが、同時に葛藤し悩んでおり横笛への思いも強く描かれる。固く決意して仏道修行に励んだ宗教心の篤い人というよりは、気持ちが弱く揺れながらもそれを乗り越えて聖として成長していくのが延慶本の滝口であると考えられる。

以上見てきたように、読み本の滝口は語り本の滝口よりも、横笛への思いや心情が深く描かれている。また語り本では横笛は滝口に一度しか声を掛けないので滝口も一度自分を抑えればよかった。し

かし読み本では横笛は一度では諦めず再び気持ちを伝えるので、滝口は二度自分を抑えなければならなかった。横笛が気持ちを強く訴えれば訴えるほど滝口は動揺し悩んだはずである。このように横笛の存在に動揺し時には弱さを見せながらも、強い意志を持って乗り越えていく滝口を描こうとしたのではないだろうか。読み本の横笛の心情が語り本の横笛の心情よりも深く描かれ、滝口に気持ちを必死に伝えることにはこうした意図があったのではないかと考える。

五、おわりに

『平家物語』に登場する横笛は悲恋の女性というだけではなく、諸本の分析から様々な人物像を持つ女性であることが分かった。語り本の横笛の特徴としては、救われることのない弱く悲しい女性として描かれていることが挙げられる。救われることのないというのは、横笛にとって出家は救済にはなっていないからである。弱く悲しい女性というのは、横笛は滝口に本心を伝えられないまま死んでしまったからである。読み本の横笛の特徴としては、滝口に対し恨みや本心を伝えていることが挙げられるが、諸本によって横笛の人物像はかなり異なる。長門本では横笛の悲しみと絶望が描かれ、南都異本は長門本に近いが、来世に対し希望を持つ。源平盛衰記では二人の気持ちは一応通じ合う。延慶本は滝口に皮肉な言葉を投げかけ恨みが深く描かれる。このように語り本の横笛の描かれ方が諸本間でほとんど同様なのに対し、読み本の横笛の描かれ方は諸本間で異なる理由として語り本と読み本の成立の違いが関わると考えられる。語り本は読み本のような記事量の多いテキストから主要記事を取捨選択、簡略化して成立したとされる。[23] 横笛像に関しても読み本から重要な所を抜粋し簡略化したため語り本の横笛はほとんど同様になったと考える。

また、語り本の横笛が自分の気持ちを伝えないのに対し、読み本の横笛が自分の気持ちを伝えることについて滝口の心情からその違いについて考察した。そして読み本の滝口は語り本の滝口よりも気持ちの揺れ、横笛に対する思いが深いという結果を得た。そのことから読み本では横笛の心情を強く描くことで滝口の揺れる心情を描き、その動揺や横笛に対する思いを乗り越えて、聖として成長する姿を描くという意図があったのではないかという結論に至った。そうすることで同じく妻や子どもへの思いに悩む維盛の気持ちを理解し、出家へと導く存在としての資格を滝口により強く与えたのではないだろうか。横笛は滝口へ、滝口は維盛へと影響を与える役割を持っており、横笛はこれらの繋がりの中で非常に重要な役割を持つ存在となっているのである。

注

① 以上の本文引用は冨倉徳次郎『平家物語全注釈下巻』（角川書店　一九六八年）による。

② Ⅰ・Ⅱの引用は注①書による。

③ 注①書に同じ。

④ 水原一校注『新潮日本古典集成　平家物語下』（新潮社　一九八一年）による。

⑤ 梶原正昭・山下宏明校注『新日本古典文学大系　平家物語下』（岩波書店　一九九三年）による。

⑥ 高木市之助校注『日本古典文学大系　平家物語下』（岩波書店　一九六〇年）による。

⑦ 市古貞次校注『日本古典文学全集　平家物語二』（小学館　一九七三年）による。

⑧ 小野美典「平家物語横笛の巻の和歌―延慶本と覚一本の物語世界を求めて―」（『山口国文』第一九号、一九九六年三月）による。

⑨ 注①書に同じ。覚一本の引用は以下同じ。

⑩ 注④書に同じ。

⑪ 十代田由美「横笛草子についての一考察」（『香川大学国文研究』第一三号　一九八八年九月）による。

⑫ 国書刊行会編『平家物語長門本』（名著刊行会、一九七四年）による。長門本の引用は以下同じ。

⑬ 李鮮瑛「『平家物語』の女人「出家」について―横笛説話の「愛」をめぐって―」（『筑波大学平家部会論集』第三号　一九九二年三月）による。

⑭ 注⑬論文に同じ。

⑮ 山内潤三『彰考館蔵南都異本平家物語―解題・翻刻・校異―』（一九六六年）により私に訓読した。南都異本の引用は以下同じ。

⑯ 水原一校訂『新定源平盛衰記』（新人物往来社　一九九一年）による。源平盛衰記の引用は以下同じ。

⑰ 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語　本文篇　下』（勉誠社　一九九〇年）による。延慶本の引用は以下同じ。

⑱ 原田敦史「延慶本『平家物語』「横笛」説話の一側面」（『国学院雑誌』第一〇八巻第四号　二〇〇七年四月）による。

⑲ 小林美和『平家物語の成立』（和泉書院　二〇〇〇年）による。

⑳ 山下宏明著『平家物語の生成』（明治書院　一九八四年）による。

㉑ 注⑧論文に同じ。

㉒ 注⑳書に同じ。

㉓ 志立正知著『『平家物語』語り本の方法と位相』（汲古書院　二〇〇四年）は、語り本が記事内容・構成・表現などの面でより広範な内容を包摂する読み本的本文を参照しつつ、摂取を繰り返してきたと述べる。また、川合康著『平家物語を読む』（吉川弘文館　二〇〇九年）は、語り本系諸本は延慶本（読み本系）のようなテクストから主要部分を抜粋した側面が強いと述べる。